

狂言の神

太宰治

青空文庫

なんじら断食するとき、かの偽善者のごとく悲し
 きおももち面容をすな。

(マタイ六章十六。)

今は亡なき、畏友いゆう、笠井一について書きしるす。

笠井一。かさいはじめ

戸籍名、手沼謙蔵。明治四十二年六月十九日、青森

県北津軽郡金木町に生れた。亡父は貴族院議員、手沼源右衛門。

母は高たか。謙蔵は、その六男たり。同町小学校を経て、大正十二年

青森県立青森中学校に入学。昭和二年同校四学年修了。同年、弘前高等学校文科に入学。昭和五年同校卒業。同年、東京帝大仏文科に入学。若き兵士たり。恥かしくて死にそうだ。眼を閉じるとさまざまの、毛の生えた怪獣が見える。なあんてね。笑いながら厳肅のことを語る。と。

「笠井一」^{かさいはじめ}にはじまり、「厳肅のことを語る。と。」にいたる

この数行の文章は、日本紙に一字一字、ていねいに毛筆でもって書きしたためられ、かれの書齋の硯箱^{すずりばこ}のしたに隠されていたものである。案ずるに、かれはこの数行の文章をかれ自身の履歴書の下書として書きはじめ、一、二行を書いているうちに、はや、かれの生涯の悪癖、^{がんしゅう}含羞の火煙が、浅間山のそれのように突

如、天をも焦がさむ勢にて噴出し、ために、「なあんてね」の韜と如うかいの一語がひよいと顔を出さなければならぬ事態に立ちいたり、かれ日頃ご自慢の竜頭蛇尾の形に歪ゆがめて置いて筆を投げた、というようなふうである。私は、かれの歿したる直後に、この数行の文章に接し、はっと凝視し、再読、三読、さらに持ち直して見つめたのだが、どうにも眼が曇つて、ついには、歔歔きよきよの波うねり、一字をも読む能わず、四つに折り畳んで、ふところへ、仕舞い込んだものであるが、内心、塩でもまれて焼き焦がされる思いであった。

残念、むねんの情であつた。若き兵士たり、それから数行の文章の奥底に潜んで在る不安、乃至ないしは、極度なる羞恥感、自意識の

過重、或る一階級への義心の片鱗へんりん、これらは、すべて、銭湯のペンキ絵くらいに、徹頭徹尾、月並のものである。私は、これより数段、巧みに言い表わされたる、これら諸感情に就ついての絶叫もしくは、嗟しわがれた眩つぶやきを、阪東妻三郎の映画のタイトルの中に、いくつでも、いくつでも、発見できるつもりで居る。殊にも、おのが貴族の血統を、何くわぬ顔して一こと書き加えていたという事実に就ついては、全くもって、女子小人の虚飾。さもししい真似をして呉れたものである。けれども、その夜あんなに私をくやしがらせて、ついに声たてて泣かせてしまったものは、これら乱雑安易の文字ではなかった。私はこの落書めいた一ひらの文反故ふみほごにより、かれの、死ぬるきわまで一定職に就こう、就こうと五体に汗

してあせっていたという動かせぬ、儼げんたる証拠に触れてしまったからである。二、三の評論家に嘘の神様、道化の達人と、あるいはまともな尊敬を以て、あるいは軽い戯れの心を以て呼ばれていた、作家、笠井一の絶筆は、なんと、履歴書の下書であった。私の眼に狂いはない。かれの生涯の念願は、「人らしい人になりたい」という一事であつた。馬鹿な男ではないか。一点にござぬ清らかな生活を営み、友にも厚き好学の青年、創作に於いては秀抜の技量を有し、その日その日の暮しに困らぬほどの財産さえあつたのに、サラリイマンを尊び、あこがれ、ついには恐れて、おのが知れる限りのサラリイマンに、阿諛あゆ、追つ従し、見るにしのびざるものがあつたのである。朝夕の電車には、サラリイマンがぎ

つしりと乗り込んでいたので、すまないやら、恥かしいやら、こわいやらにて眼のさきがまっくろになつてしまつて居づらくなり、つぎの駅で、すぐさま下車する、ゲエテにさも似た見ごとの顔を紙のように白ちやけさせて、おどおど私に語つて呉れたが、それから間もなく死んでしまつた。風がわりの作家、笠井一の縊死は、やよいなかば、三面記事の片隅に咲いていた。色様様の推察が捲き起つただけれども、そのことごとくが、はずれていた。誰も知らない。みやこ新聞社の就職試験に落第したから、死んだのである。

落第と、はつきり、きまつた。かれら夫婦ひと月ぶんの生活費、その前夜に田舎の長兄が送つてよこした九十円の小切手を、けさ

早く持ち出し、白昼、ほろ酔いに酔って銀座を歩いてきた。古い
 疲れたる帝国大学生、袖そでぐち口ぼろぼろ、蚊の脛すねほどに細長きズボ
 ン、鼠いろのスプリングを羽織って、不思議や、若き日のボオド
 レエルの肖像と瓜うり二つ。破帽をあみだにかぶり直して歌舞伎座、
 一幕見席の入口に吸いこまれた。

舞台では菊五郎の権八が、したたるほどのみどり色の紋付を着
 て、赤い脚絆きやはん、はたはたと手を打ち鳴らし、「雉きじも泣かずば撃
 たれまいに」と呟つぶやいた。嗚咽おえつが出て出て、つづけて見ている勇気
 がなかった。開演中お静かにお願ひ申します。千も二千も色様様
 の人が居るのに、歌舞伎座は、森閑しんかんとしていた。そつと階段を
 おり、外へ出た。巷ちまたには灯がついていた。浅草に行きたく思った。

浅草に、ひさごやというししの肉を食べさせる安食堂があった。きようより四年まえに、ぼくが出世をしたならば、きつと、お嫁にもらつてあげる、とその店の女中のうちで一ばんのしんまい新米、使いはしりをつとめていた眼のすずしい十五六歳の女の子に、そう言つて元気をつけてやつた。その食堂には、大工や土方人足などがお客であつて、角帽かぶつた大学生はまつたく珍らしかつた様子で、この店だけは、いつ来ても大丈夫、六人の女中みんなが、あれこれとかまつて呉くれた。人からあなどりを受け、ぺしやんこに踏みにじられ、ほうり出されたときには、書物を売り、きまつて三円ながしのお金をつくり、浅草の人ごみのなかへまじり込む。その店のちようし一本十三銭のお酒にかなり酔い、六人の女

中さんときれいに遊んだ。その六人の女中のうち、ひとり目立って貧しげな女の子に、声高く夫婦約束をしてやって、なおそのうえ、女の微笑するようないつわりごとを三つも四つも、あらわでなく誓ってやったものだから、女の子、しだいに大学生を力とたのんだ。それから奇蹟があらわれた。女の子、愛されているという確信を得たその夜から、めきめき器量をあげてしまった。三年まえの春から夏まで、百日も経たぬうちに、女の、髪のかたちからして立派になり、思いなしか鼻さえ少したかくなった。ひたいあご額も顎も両の手も、ほんのり色白くなったようでお化粧が巧くなったのかも知れないが、大学生を狂わせてはすかしからぬ堂々の貫かんろ禄くをそなえて来たのだ。お金の有る夜は、いくらでも、いくら

でも、その女のひとにだまされて、お金を無くする。そうして、女のひとにだまされるということは、よろこばしいものだと思つづく思つた。女は、大学生から貰つたお金は一銭もわが身につけず、ほうばいの五人の女中にわけてやり、ばたばたと脛の蚊をう扇ちわで追いはらつて浅草まつりが近づいたころには、その食堂のかんばん娘になつていた。神のせいではない。人の力がヴィナスを創つた。女の子は、せわしくなるにつれて恩人の大学生からしだいに離れ、はなれた、とたんに大学生の姿も見えなくなった。大学生には困難の年月がはじまりかけていたのである。

その夜、歌舞伎座から、遁とんそ走して、まる一年ぶりのひさごやでお酒を呑みビールを呑みお酒を呑み、またビールを呑み、二十

個ほどの五十錢銀貨を湯水の如くに消費した。三年まえに、ここではつきりと約束しました。ぼくは、出世をいたしました。よい子だから、けさの新聞を持っておいで。ほら、ね。ぼくの写真が出ています。これはね、ぼくの小説本の広告ですよ。写真、ベソかいてる？ そうかなあ。微笑したところなんだがなあ。約束、わすれた？ あ、ちよいと、ちよいと。これは、新聞さがして持って来て呉れたお礼ですよ。まったく気がるに、またも二、三円を乱費して、ふと姉を思い、荒つぽい嗚咽が、ぐしやつと鼻にからんで来て、三十前後の新しんない内流しをつかまえ、かれにお酒をすすめたが、かれ、客の若さに油断して、ウイスキーがいいとぜいたく言った。おや、これは、しっけい、しっけい。若いお客は、

気まえよく、あざむかれてやってウイスキーを一杯のませ、さらにそのうえ、何か食べたいものはないかと聞くのである。新内いよいよ気をゆるし、頬杖ついて、茶わんむしがいいなど応え、黒眼鏡の奥の眼が、ちろちろ薄笑いして、いまは頗る得意げであった。さて、新内さん。あなたというお人は、根からの芸人ではあるまい。なにかしら自信ありげの態度じゃないか。いずれは、ゆいしよ正しき煙管屋きせるやの若旦那。三代つづいた鯉かつおぶし節問屋の末っ子。ちがいますか？　くだんの新内、薄化粧の小さな顔をにゅつと近よせ、あたりはわかるひそひそ声で、米屋、米屋、と囁いた。そこへ久保田万太郎があらわれた。その店の、十の電燈のうち七つ消されて、心細くなったころ、鼻赤き五十を越したくらいの商

人が、まじめくさってはいって来て、女中みんなが、おや、兄さん、と一緒にかんで腰を浮かせた。立ちあがって、ちよつとかれに近づき、失礼いたします。久保田先生ではございませんか。私は、ことし帝大の文科を卒業いたします者で、少しは原稿も売れてまいりましたが、未だほとんど無名でございます。これから、よろしく、教えて下さい。直立不動の姿勢でもってそうお願いしてしまったので、商人、いいえ人違いですと鼻のさきで軽く掌を振る機会を失い、よし、ここは一番、そのくぼたとやらの先生に化けてやろうと、悪事の腹を据すえたようである。

——ははは。ま。掛けたまえ。

——はっ。

— のみながら。

— はっ。

— ひとつ。

— はっ。という工合いに、兵士の如く肩をいからせ、すすめられた椅子に腰をおろして、このようなところで先生にお逢いするとは実もって意外である。先生は毎晩ここにおいてになるのでしようか。私は、先夜、先生の千人風呂という作品をはいしやう拝誦させていただきましたが、やはり興奮いたしましたして、失礼ながらお手紙さしあげたはず筈でございませうが。

— あれは君、はずかしいものだよ。

— しつれいいいたしました。私の記憶ちがいでございました。

千人風呂は葛西善藏かさい氏の作品でございました。

——まったくもつて。

わけのわからぬ問答に問答をかさねて、そのうちに、久保田氏は、精神とかジャンルとか現象とかのこむずかしい言葉を言い出し、若い作家の読書力減退についてのお説教がはじまり、これは、まさしく久保田万太郎なのかもしれないなどと思つたら酔いも一時にさめはて、どうにも、つまらなくなつて来て、蹠蹠そうろうと立ちあがり、先生、それではごめん下さい。これから旅に出るのです。ええ、このお金がなくなつてしまふところまで、と言いつつ内ポケットから二三枚の十円紙幣をのぞかせて、見せてやつて、外へ出た。

あああ。今夜はじつに愉快であつた。大川へはいろいろか。線路へ飛び込もうか。薬品を用いようか。新内と商人と、ふたりの生活人に自信を与えた善根によつても、地獄に墮ちるうれいはない。しずかな往生ができそうである。けれども、わが身が円タク拾つて荻窪の自宅へ易々とかえられるような状態に在るうちは、心もにぶつて、なかなか死ねまい。とにかく東京から一步でも、半歩でもなんでも外へ出る。何卒^{なにとぞ}して、今夜のうちに、とりかえしのつかないところまで行つてしまつて置かなければ。よこはまほんもく二円はどうだ。いやならやめろ。二円おんの字、承知のすけ。ぶんぶん言つて疾進してゆく、自動車の奥隅で、あつ、あつと声を放つて泣いていた。今は亡き、畏友、笠井一もへつたくれもな

し。ことごとく、私、太宰治ひとりの身のうえである。いまにいたって、よけいの道具だてはせぬことだ。私は、あした死ぬるのである。はじめに意図して置いたところだけは、それでも、言つて知らせてあげよう。私は、日本の或る老大家の文体をそっくりそのまま借りて来て、私、太宰治を語らせてやろうと企てた。自己喪失症とやらの私には、他人の口を借りなければ、われに就いて、一言一句も語れなかつた。たち拠らば大樹の陰、たとえば鷗外、森林太郎、かれの年少の友、笠井一なる夭折ようせつの作家の人となり語り、そうして、その縊死のあとさきに就いて書きしるす。その老大家の手記こそは、この「狂言の神」という一篇の小説に仕上るしくみになっていたのに、ああ、もはやどうでもよくなつ

た。文章に一種異様の調子が出て来て、私はこのまま順風を一ぱい帆にはらんで疾駆する。これぞ、まことのロマン調。すすまむ哉かな。あす知れぬいのち。自動車は、本牧の、とあるホテルのまえにとまった。ナポレオンに似たひとだな、と思っていたら、やがてその女のひとの寝室に案内され枕もとを見ると、ナポレオンの写真がちやんと飾られていた。誰しもそう思うのだなと、やっとうれしく、あたたかくなつて来た。

その夜、ナポレオンは、私の知らない遊びかたを教えて呉れた。あくる朝は、雨であった。窓をひらけば、ホテルの裏庭。みどりの草が一杯に生えて、牧場に似ていた。草はらのむこうには、赤濁りに濁った海が、低い曇天に押しつぶされ、白い波がしらも

無しに、ゆらりゆらり、重いからだをゆすぶっていて、窓のした、草はらのうえに捨てられてある少し破れた白足袋は、雨に打たれ、女の青い縞しまのはんてんを羽織はねおりつて立っている私は、錐きりで腋わきの下を刺くすされ撥くすぐられ刺されるほどに、たまらない思いであつた。ハ克蘭カイをごろんなさればよろしいに、と南国なま訛りのナポレオン君が、ゆうべにかわらぬ閑雅かんがの口調でそうすすめて、にぎやかかの万国旗が、さつと脳裡のうりに浮んだが、ばか、大阪へ行く、京都へも行く、奈良へも行く、新緑の吉野へも行く、神戸へ行く、ナイヤガラ、と言いかけて、ははははと豪傑笑いの真似をして見せた。しっけい。さようなら、あら、雨。はい、お傘。私は好かれているようであつた。その傘を、五円で買います。みんながどつと声

をたてて笑い崩れた。ああ、ここで遊んでいたい。遊んでいたい。額がくるめく。涙が煮える。けれども私は、辛抱した。お金がないのである。けさ、トイレットにて、真剣にしらべてみたら、十円紙幣が二枚に五円紙幣が一枚、それから小銭が二、三円。一夜で六、七十円も使ったことになるが、どこでどう使ったのか、かいつもく見当つかず、これだけの命なのだ。まずしい気持ちで死にたくはなかつた。二、三十円を無雑作にズボンのポケットへねじ込んであるが儘ままにして置いて死ぬのだ。儉約しなければいけない、と生れてはじめてそう思った。花の絵日傘をさして停車場へいそいだのである。停車場の待合室に傘を捨て、駅の案内所で、江の島へ行くには？ と聞いたのであるが、聞いてしまつてから、あ

あ、やつぱり、死ぬるところは江の島ときめていたのだな、と素直に首肯うなずき、少し静かな心地になって、駅員の教えて呉れたとおりの汽車に乗った。

ながれ去る山山。街道。木橋。いちいち見おぼえがあつたのだ。それでは七年まえのあのときにも、やはりこの汽車に乗つたのだな、七年まえには、若き兵士であつたそう。ああ。恥かしくて死にそう。或る月のない夜に、私ひとりが逃げたのである。とり残された五人の仲間、すべて命を失つた。私は大地主の子である。地主に例外は無い。等しく君の仇きゆうてき敵である。裏切者としての厳酷なる刑罰を待っていた。撃ちころされる日を待っていたのである。けれども私はあわて者。ころされる日を待ち切れず、

われからすすんで命を断とうと企てた。衰亡のクラスにふさわし
 き破廉恥はれんち、頹廢たいはいの法をえらんだ。ひとりでも多くのものに審判
 させ嘲笑させ悪罵あくばさせたい心からであつた。有夫の婦人と情死を
 図つたのである。私、二十二歳。女、十九歳。師走しわす、酷寒の夜半、
 女はコオトを着たまま、私もマントを脱がずに、入水じゆすいした。女
 は、死んだ。告白する。私は世の中でこの人間だけを、この小柄
 の女性だけを尊敬している。私は、牢へいれられた。自殺ほうじよ幫助
 罪ざいという不思議の罪名であつた。そのときの、入水の場所が、
 江の島であつた。（さきに述べた誘因のためにのみ情死を図つた
 のではなしに、そのほかのくさぐさの事情がいくんでいたこと
 をお知らせしたくて、私は、以下、その夜の追憶を三枚にまとめ

て書きしるしたのであるが、しのびがたき困難に逢着し、いまはそつくり削除した。読者、不要の穿鑿せんさくをせず、またの日の物語に期待して居られるがよい）私は、煮えくりかえる追憶からさめて、江の島へ下車した。

風の勁つよい日で、百人ほどの兵士が江の島へ通ずる橋のたもとに、むらがつて坐り、ひとしく弁当をたべていた。こんなにかくさんの人のまえで海へ身を躍らせたならば、ただいたずらに泳ぎ自慢の二三の兵士に名をあげさせるくらいの結果を得るだけのことであろう。私は、荒れている灰色の海をちらと見ただけで、あきらめた。橋のたもとの望富閣という葦簾よしずを張りめぐらせる食堂には、いり、ビールを一本そう言った。ちろちろと舌でなめるが如く、

はりあいのない呑みかたをしながら、乱風の奥、黄塵に烟る江の島を、まさにうらめしげに、眺めていたようである。背を丸くし、頬杖ついて、三十分くらい、じっとしていた。このまま坐つて死んでゆきたいと、つくづく思った。新聞の一つ一つの活字が、あんなに穢よごれて汚く思われたことがなかった。鼠いろのスプリング。細長い帝国大学生。背中を丸くして、ぼんやり頬杖をつく習癖がある。自殺しようと家出をした。そのような記事がいま眼のまえにあらわれ出ても、私は眉ひとつうごかすまい。むごいことには、私、おどろく力を失ってしまった。私に就いての記事はなかったけれども、東郷さんのお孫むすめが、わたくしひとりで働いて生活したいと言うて行方しれずになった事実が、下品にゆがめ

られて報告されていた。兵士たちが望富閣の食堂へぞろぞろとは
いつて来て、あまり勢いよくはいつて来たので私のテエブルをこ
ろがした。コップもビールの壘びんも、こわれなかったけれど、たし
かに未だ半分以上も壘に残っていたビールが白い泡を立てつつこ
ぼれてしまった。二、三の女中は、そのものを音を聞き、その光景
を背のびして見ていながら、当りまえの様な顔をして、なんにも
ものを言わなかった。トオキイの音が、ふっと消えて、サイレン
トに変わった瞬間みたいに、しんとなって、天鷲ビロード絨のうえを猫が歩
いているような不思議な心地にさせられた。狂気の前兆のよう
にも思われ、気持ちが悪くなかったので、それでも、わざとゆっ
くりと立ちあがり、お勘定してもらって外へ出た。たちまち烈風。

スプリングの裾すそがぱつとめくりあげられ、一握の小砂利が頼めがけて叩きつけられぱちぱち爆はぜた。ぐつと眼をつぶって、今夜死ぬるとわれに囁ささやき、みんながみんな遠くへ去って行って、世界に私がひとりだけ居るような気持ちで、ながいこと道路のまんなかに立ちつくした。眼をあいたときには、まったく意志を失い、幽霊のように歩いて、磯いそへ出た。真くろい雲が充満し、空は暗くて低かった。見渡すかぎり、人の影がなかった。腐りかけた漁船がひとつ、砂浜に投げ捨てられ、ひっくりかえって、まっくろい腹を見せてあるほかには、犬ころ一匹いなかった。私は、ズボンのポケットに両手をつっこみ、同じ地点をいつまでももうろうろ歩きまわり、眼のまえの海の形容詞を油汗ながして捜査していた。あ

あ、作家をよしたい。もがきあがいて捜しあてた言葉は、「江の島の海は、殺風景であった」私はぐるつと海へ背をむけた。この海は浅く、飛びこんだところで、膝小僧をぬらすくらいのものであろう。私は、しくじりたくなかった。よしんばしくじっても、そのあと、そ知らぬふりのできるような賢明の方法を^{えら}択ばなければ。未遂で人に見とがめられ、^{なわめ}縄目の恥辱を受けたくなかった。それからどれほど歩いたのか。百種にあまる色さまさまの計画が両国の花火のようにぱつとひらいては消え、ひらいては消え、これときまらぬままに、ふらふら鎌倉行の電車に乗った。今夜、死ぬのだ。それまでの数時間を、私は幸福に使いたかった。ごつとん、ごつとん、のろすぎる電車にゆられながら、暗鬱でもない、

荒涼でもない、孤独の極でもない、智慧ちえの果でもない、狂乱でも
 ない、阿呆感でもない、号ごうきゆう泣なみでもない、悶悶ふんぬでもない、嚴肅
 でもない、恐怖でもない、刑罰でもない、憤怒ふんぬでもない、諦観ていかんで
 もない、秋涼でもない、平和でもない、後悔でもない、沈思でも
 ない、打算でもない、愛でもない、救いでもない、言葉でもつて
 そんなに派手に誇示できる感情の看板は、ひとつも持ち合せてい
 なかった。私は、深刻でなかった。電車の隅で一賤民のごとく寒
 さにふるえて眼玉をきよきよろうごかしていただけのことであ
 ったのである。途中、青松園という療養院のまえをとおった。七
 年まえの師走、月のあかい一夜、女は死に、私は、この病院に収
 容された。ひとつきほど、ここで遊んで、からだの恢復をはかつ

たのであるが、そのひとつき間の生活は、ほのかにはあつたけれども、私に生きているよろこびを知らせて呉れた。それからの七年間、私にとつては五十年、いや十種類の生涯のようにも思われたほど、さまざまの困難が起り、そのときそのときの私の辛抱もまったくむだのようであつて、私にはあたりまえの生活ができず、ふたたび死ぬる目的を以て、こんどはひとりであつて来た。

療養院にも七年の風雨が見舞つていて、純白のペンキの塗られていた離宮のような鉄の門は鼠いろに変色し、七年間、私の眼にいいよ鮮明にしみついていた屋根の瓦かわらの燃えるような青さも、まだらに白く禿はげて、ところどころを黒い日本瓦で修繕され、きたならしく、よそよそしく、まったく他人の顔であつた。七年間、

ほかの人から見たならば、私の微笑は、私の姿態は、この建築物よりいつそう汚れて見えるだろう。おや？ 不思議のこともあるものだ。あの岩がなくなっているのである。ねえ、この岩が、お母さんのような気がしない？ あたたくくて、やわらかくて、この岩、好きだな、女のひとはそう言つて撫なでまわして、私も同感であつたあのひらたい岩がなくなった。飛びこむ直前までそのうえで遊びたわむれていたあの岩がなくなった。こんな筈はずはない。どちらかが夢だ。がつたん、電車は、ひとつ大きくゆれて見知らぬ部落の林へはいった。微笑ほほえましきことには、私はその日、健康でさえあつたのだ。かすかに空腹を感じたのである。どこでもいい、にぎやかなところへ下車させて下さい、と車掌さんにたのん

で、ほどなく、それではここで御降りなさいと教えられ、あたふたと降りたところは長谷であった。雨が頬を濡らして呉れておお清浄になったと思えて、うれしかった。成熟した女学生がふたり、傘がなくて停車場から出られず困惑の様子で、それでもくつつつ笑いながら、一坪ほどの待合室の片隅できっちり品よく抱き合っていた。もし傘が一本、そのときの私にあつたならば、私は死なずにすんだのかも知れない。溺れる者おぼのわら一すじ。深く、けわしく、よろめいた。誓う。あなたのためには身を粉にして努める。生きてゆくから、叱らないで下さい。けれどもそれだけのことであつた。語らざれば、うれしい無きに似たりとか。その二人の女のうちささまゆ笹眉をひそめて笑う小柄のひとに、千万の思いをこめて見

つめる私の瞳の色が、了解できずに終わったようだ。ひらつと、できるだけ軽快に身をひるがえして雨の中へおどり出た。つばめのようにはいかなかつた。あやうく滑つてころぶところであつた。ふりかえりたいな。よせ！　すぐ真向いの飲食店へさっさとはいつた。薄暗い食堂の壁には、すてきに大きい床屋鏡がはめこまれていて、私の顔は黒眼がち、人なつかしげに、にこにこしていた。意外にも福福しい顔であつたのだ。一刻も早く酔いしれたく思つて、牛鍋を食い散らしながら、ビールとお酒とをかわるがわるに呑みませた。君、茶化してしまえないものがあつたのである。呑んでも呑んでも酔えなかつた。信じ給え。鏡の中のわが顔に、この世ならず深く柔和の憂色がただよい、それゆえに高雅、車夫馬

丁を常客とする悪臭ふんぷんの安食堂で、ひとり牛鍋ねぎの葱をつついている男の顔は、笑ってはいけない、キリストそのままであつたという。ひるごろ私は、作家、深田久弥氏のもとをたずねた。かれの、はつきりすぐれたる或る一篇の小説に依り、私はかれと話し合いたく願つていた。相そうしゆう州鎌倉二階堂。住所も、忘れてはいなかつた。三度、ながい手紙をさしあげて、その都度、あかるい御返事いただいた。私がその作家を好きであるのと丁度おなじくらいに、その作家もまた私を好きなのだ、といつのままにか、ひとりできめてしまつていた。のこり少い時間である。仕合せのことに用いなければいけない。私は、一秒の猶予ゆうよもなしに、態度をきめた。そのときの私には、深田氏訪問以上の仕合せを考案し

ているいとまがなかつた。雨はあがり、雲は矢のように疾駆し、ところどころ雲の切れま、洗われて薄い水いろの蒼あおぞら空が顔を見せて、風は未だにかなり勁く、無法者、街々を走つてあるいていたが、私も負けずに風にさからつてどんどん大股であるいてやった。恥ずかしいほどの少年になつてしまった。千里の馬には千里の糧。たわむれつぶやに呟いて、たばこ屋に立ち寄り、キャメルという高価の外国煙草を二個も買い、不良少年のふりをして、こつそり吸つては、あわててもみ消す。腰のまがつた小さい巡査が、両手をうしろに組んで街道のまんなかをぶらりぶらり、風に吹かれて歩いていて。私は二階堂への路みちじゆん順をたずねた。私は慧けい眼がん。この老巡査は、はたして忘れ得ぬ人たちの中のひとりであつた。

私の手を引かんばかり、はにかむような咄吃とつきつの口調で繰りかえし繰りかえし教えて呉れた。なに、二階堂はすぐそのさきに見えるているのだ。老憊ろうはいの一生活人へ、まこと敬虔けいけんの心でお礼を申し述べ、教えられたとおりの路をあやまたずに三曲りして、四曲りした角に、なんなく深田久弥のつましき門札を見つけた。かねて思いはかつていたよりも十倍くらいきちんとしたお宅だったので、これは、これは、とひとりごとを言いながら、内心うれしく、微笑とめてもとまらなかつた。石の段段をのぼり、字義どおりに門をたたいて、出て来た女中に大声で私の名前を知らせてやった。うれしや、主人は、ご在宅である。右手の甲で額の汗をそつと拭ぬぐうた。女中に案内されて客間にとおされ、わざと秀才の学

生らしく下手にきちんと坐つて、芝生の敷きつめられたお庭を眺め、筆一本でも、これくらい的生活ができるのだ、とずいぶん気強く思ったものだ。こよい死ぬる者にとつてはふさわしからぬ安堵あんどの溜息がほつと出て、かるく狼狽ろうばいしていたとき、蓬髮花顔ほうはつかがんのこの家のあるじが写真のままの顔して出て来られて、はじめての挨拶をかわしたのであつたが、私には、はじめての人のようにも思われず、おととしの春にふと私から遠ざかっていった友人の久保君も、三四年まえのたしか今頃の季節に、きのう深田久弥に逢つて来たと言ひ、日本人の作家には全く類がないくらいのも、文学でないホオム・ライフを持つていて、あまり温順なので、こちらが腹の中で深田久弥の間拔野郎と呟いて笑つているようなひと

くいけない錯覚がひらひらちらついて困惑するほど、それほどた
まらなく善良の人がらなのだよ、と私に教えて呉れたことがあつ
たけれど、いま私も、こうして対坐して、ゆくりなく久保君の身
のうへと、それから、「深田久弥の間拔野郎」を思い出し、悖^{はいれ}
礼^いの瘠^{せきく}狗、千石船に乗った心地で、ずいぶん油断をしてしまつ
た。いまさら、なにも、論戦しなければならぬ必要もなし、すべ
ての言葉がめんどうくさくて、ながいこと二人、庭を眺めてばか
りいた。私は形^{けい}而下^{じか}的にも四肢を充分にのばして、そうして、今
のこの私の豊^{ほう}沃^{よく}を、いつたい、誰に教えてあげようか、保田與
重郎氏は涙さえ浮べて、なんどもなんども首^{うなず}肯いて呉れるだろう。
保田のそのうしろ姿を思えば、こんどは私が泣きたくなつて、

——だんだん小説がむずかしくなつて来て困ります。

——そう。……でも。

口ごもつて居られた。不服のようであつた。ヴィルヘルム・マ
イスタアは、むずかしく考えて書いた小説ではなかつた、と私は
われに優しく言い聞かせ、なるほど、なるほどと了解して、そう
して、しずかな、あたたかな思いをした。私は、ふと象しょうぎ戯をし
たく思つて、どうでしょうと誘つたら、深田久弥も、にこにこ笑
いだして、氣がるく応じた。日本で一ばん氣品が高くて、ゆとり
ある合戦をしようと思つた。はじめは私が勝つて、つぎには私が
短氣を起したものだから、負けた。私のほうが、すこし強いよう
に思われた。深田久弥は、日本に於いては、全くはじめての、

「精神の女性」を創った一等の作家である。この人と、それから井伏鱒二氏を、もっと大事にしなければ。

—— 一対一ということにして。

私は象戯こまの駒を箱へしまいながら、

—— 他日、勝負をつけましょう。

これが深田氏の、太宰についてのたった一つの残念な思い出話になるのだ。「一対一。そのうち勝負をつけましょう、と言ひ、私もそれをたのしみにしていたのに。」

ここを訪おとうみちみち私は、深田氏を散歩に誘い出して、一緒にお酒をたくさん呑もう悪い望や、そのほかにも二つ三つ、メフィストのささやきを準備して来た筈であったのに、このような物静

かな生活に接しては、われの暴い息づかいさえはばかられ、一ひらの桜の花びらを、掌に載せているようなこそばゆさで、充分に伸ばした筈の四肢さえいまは萎縮して来て、しだいしだいに息苦しく、そのうちにぽきんと音たててしよげてしまった。なんにも言えず飼ひ馴らされた牝豹めひようのように、そのままそつと、辞し去った。お庭の満開の桃の花が私を見送っていて、思わずふりかえったが、私は花を見て居るのではなかった。その満開の一枝に寒くぶらんとぶらさがっている縄きれを見つめていた。あの縄をポケットに仕舞って行こうか。門のそとの石段のうえに立って、はるか地平線を凝視し、遠あかねの美しさが五臓六腑ごそうろつぷにしみわたつて、あのときは、つくづくわびしく、せつなかつた。ひきかえし

て深田久弥にぶちまけ、二人で泣こうか。ばか。薄きたない。間一髪のところ、こらえた。この編上げの靴の紐ひもを二本つなぎ合わせる。短かすぎるようならば、ズボン下の紐が二尺。きめてしまつて、私は、大泥棒のように、どンドン歩いた。黄昏たそがれの巷ちまた、風を切つて歩いた。路傍のほの白き日蓮上人、辻説法跡の塚が、ひゅつと私の視野に飛び込み、時われに利あらずという思いもつかぬ荒い言葉が、口をついて出て、おや？ と軽くおどろき、季節に敗れたから死ぬるのか、まさか、そうではあるまいな？ と立ちどまつて、詰問した。否、との応えを得て、こんどはのろのろ歩きはじめた。死んでしまったほうが安楽であるという確信を得たならば、ためらわずに、死ね！ なんのとがもないのに、わが

いのちを断つて見せるよりほかには意志表示の仕方を知らぬ伶俐なるがゆえに、慈愛ふかきがゆえに、一掬いっきくの清水ほど弱い、これら一むれの青年を、ふびんに思うよ。死ぬるがいいとすすめることは、断じて悪魔のささやきでない、立証し得るうごかぬ哲理の一体系をさえ用意していた。そうして、その夜の私にとつて、縊死いしは、健康の処生術に酷似こくじしていた。綿密の損得勘定の結果であつた。私は、猛たけく生きとおさんがために、死ぬるのだ。いまさら問答は無用であろう。死ぬることへ、まつすぐに一すじ、明快、完璧の鑄型ができていて、私は、鎔とかされた鉛のように、鑄型へさつと流れ込めば、それでよかつた。何故に縊死の形式を選出したのか。スタヴロギンの真似ではなかつた。いや、ひよつとする

と、そうかも知れない。自殺の虫の感染は、黒死病の三倍くらいに確実で、その波紋のひろがりには、王宮のスキヤンダルの囁きささやよりも十倍くらい速かった。縄に石鹼を塗りつけるほどに、細心に安楽の往生を図ることについては、私も至極賛成であつて、甥おいの医学生いせいせいの言に依よつても、縊死は、この五年間の日本に於いて八十七パーセント大丈夫であつて、しかもそのうえ、ほとんど無苦痛なそうではないか。いちどは薬品で失敗した。いちどは入水じゆすいして失敗した。日本のスタヴロギン君には、縊死という手段を選出するのに、永いこと部屋をぐるぐる歩きまわつてあれこれと思わ煩わずらう必要がなかつたのである。宿屋へ泊つて、からだを洗い、宿わの、ま新らしい浴衣ゆかたを着て、きれいに死にたく思つたけれども、

私のからだだが、その建築物に取りかえしのつかぬ大きい傷を与え、つつましい一家族の、おそらくは五、六人のひとを悲惨の境遇に蹴落すのだということに思いいたり、私は鎌倉駅まえの花やかな街道の入口まで来て、くるりと廻れ右して、たつたいま、とおつて来たばかりの小暗おぐらき路をのそのそ歩いた。駅の附近のバアのラジオは私を追いかけるようにして、いまは八時に五分まえである、台湾はいま夕立ち、日本ヨイトコの実況放送はこれでお仕舞いである、と教えた。おそくまでまごついて居れば、すぐにも不審を起されるくらいに、人どおりの無い路であつた。善は急げ、というユウモラスな言葉が胸に浮んで、それから、だしぬけに二、三の肉親の身の上が思い出され、私は道のつづきのように路傍の雑

木林へはいつていった。ゆるい勾配こうばいの、小高い岡になっていて、風は、いまだにおさまらず、さつさつと雑木の枝を鳴らして、少なからず寒く思った。夜の更ふけるとともに、私の怪しまれる可能性もいよいよ多くなつて来たわけである。人がこわくてこわくて、私は林のさらに奥深くへすすんでいった。いつてもいつても、からだがきまらず、そのうちに、私のすぐ鼻のさき、一丈ほどの赤土の崖がのっそり立った。見あげると、その崖のうえには、やしろでもあるのか、私の背丈くらいの小さい鳥居が立っていて、常と磐木きわぎが、こんもりと繁り、その奥ゆかしさが私をまねいて、私は、すすきや野いばらを搔かきわけ、崖のうえにゆける路を捜したけれども、なかなか、それらしきものは見当らず、ついには、崖の赤

土に爪を立て立て這い登り、月の輪の無い熊、月の輪の無い熊、と二度くりかえして呟いた。やつとのことで崖の上までたどりつき、脚下の様を眺めたら、まばらに散在している鎌倉の街の家々の灯が、手に取るように見えたのだ。熊は、うろろう場所を捜した。薬品に依って頭脳を麻痺まひさせているわけでもなし、また、お酒に勢いを借りているわけでもない。ズボンのポケットには二十円余のお金がある。私は一糸みだれぬ整うた意志でもって死ぬるのだ。見るがよい。私の知性は、死ぬる一秒まえまで曇らぬ。けれどもひそかに、かたちのことを気にしていたのだ。清潔な憂悶の影がほしかった。私の腕くらいの太さの枝にゆらり、一瞬、藤の花、やっぱりだめだと望を捨てた。憂悶どころか、阿呆あほうづら。

しかも噂と事ちがつて、あまりの痛苦に、私は、思わず、ああつ、と木霊こだまするほど叫んでしまった。楽じゃないなあ、そう呟いてみて、その己れの声が好きで好きで、それから、ふっとたまらなくなつて涙を流した。死ぬる直前の心には様様の花の像が走馬燈のようにくるくるまわつて、にぎやかなものの由であるが、けれども私は、さっぱりだめであつた。私は釣り上げられたいもりの様にむなしく手足を泳がせた。かたちの間抜けにしんから閉口して居ると、私の中のちやちな作家までが顔を出して、「人間のもつとも悲痛の表情は涙でもなければ白髪でもなし、まして、眉間みけんの皺しわではない。最も苦悩の大いなる場合、人は、だまって微笑ほほえんでいるものである。」虫の息。三十分ごとに有るか無しかの一呼吸

をしているように思われた。蚊かの泣き声。けれども痛苦はいよいよ劇はげしく、頭脳はかえって冴えわたり、気の遠くなるような前兆はそよともなかった。こうして喉の軟骨のつぶれるときをそれこそ手をつかねて待っていないといけないのだ。ああ、なんとう、気のきかない死にかたを選んだものか。ドストエーフスキイには縊死の苦しさがわからなかった。私は、はつきり眼を開いて、気の遠くなるのをひたすら待った。しかも私は、そのときの己れの顔を知っていたのだ。はつきりと、この眼に見えるのであった。顔一めんが暗紫色、口の両すみから真白い泡あわを吹いている。この顔とそっくりそのままのふくれた河豚ふぐづらを、中学時代の柔道の試合で見たことがあるのだ。そんなに泡の出るほどふんばらずと

も、と当時たいへん滑稽に感じていた、その柔道の選手を想起したとたんに私は、ひどくわが身に侮辱を覚え、怒りにわななき、やめ！ 私は腕をのばして遮しやにむに二無二枝につかまった。思わず、けだもののような咆ほうこう哮が腹の底から噴出した。一本の外国煙草がひと一人の命と立派に同じ価格でもって交換されたという物語。

私の場合、まさにそれであった。縄を取去り、その場にうち伏したまま、左様、一時間くらい死人のようになぐったりしていた。蟻ありの動くほどにも動けなかった。そのときポケットの中の高価の煙草を思い出し、やたらむしように嬉しくなつて、はじかれたように、むつくり起きた。ふるえる手先で煙草の封をきつて一本を口にくわえた。私のすぐうしろ、さらさらとたしかに人の気配がし

た。私はちつともこわがらず、しばらくは、ただ煙草にふけり、それからゆつくりうしろを振りかえつて見たのであるが、小さい鳥居が月光を浴びて象牙ぞうげのように白く浮んでいるだけで、ほかに、小鳥の影ひとつなかった。ああ、わかった。いまのあのけいは、おそらく、死神の逃げて行つた足音にちがいない。死神さまにはお気の毒であつたが、それにしても、煙草というものは、おいしいものだなあ。大家にならずともよし、傑作を書かずともよし、好きな煙草を寝しなに一本、仕事のあとに一服。そのような恥かしくも甘い甘い小市民の生活が、何をかくそう、私にもむりなくできそうな気がして来て、俗的なるものの純粹度、というろくしよう よううんろんしや すこぶ 緑 青畑の妖雲論者にとっては頗るふさわしからぬ題目に

ついて思いめぐらし、眼は深田久弥のお宅の灯を、あれか、これか、とのんきに捜し^{もと}需^{もと}めていた。

ああ、思いもかけず、このお仕合せの結末。私はすかさず、筆を^お攔^おく。読者もまた、はればれと微笑んで、それでも一応は用心して、こつそり小声でつぶやくことには、

——なあんだ。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年8月30日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：しづ

1999年7月22日公開

2010年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狂言の神

太宰治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>